



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	国際バカロレア・ディプロマプログラム「美術」「比較研究」について1: 学習内容の整理と生徒の議論的な振り返りの比較と考察から (個人研究・共同研究) (fulltext)
Author(s)	後藤, 保紀
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 45: 163-173
Issue Date	2018-09
URL	http://hdl.handle.net/2309/150121
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

国際バカロレア・ディプロマプログラム「美術」「比較研究」について1

— 学習内容の整理と生徒の議論的な振り返りの比較と考察から —

東京学芸大学附属国際中等教育学校 後藤保紀

目 次

1. はじめに	164
2. 研究の方法	164
3. DP「美術」における比較研究の目的	164
4. DP「美術」における比較研究の形式と既習事項	165
4. 1 比較研究の形式と本校の特徴	165
4. 2 コア領域と比較研究	165
4. 3 既習事項1「Comparative study」	166
4. 4 既習事項2「Is it art?」	166
5. DP「美術」における内容と評価	166
5. 1 「A 形式的特性の分析 (Analysis of formal qualities)」の観点	166
5. 2 「B 機能と目的の解釈 (Interpretation of function and purpose)」の観点	167
5. 3 「C 文化的重要性の評価」の観点	167
5. 4 「D 比較と関連付け」の観点	168
5. 5 「E 発表と科目特有の言語」の観点	168
5. 6 「F 自身の作品制作の実践への関連付け (上級レベルのみ)」の観点	169
6. 生徒による DP「美術」比較研究の意味付け	169
6. 1 TOK の関連について	169
6. 2 他教科との関連について	170
6. 3 比較研究に対する生徒の考えについて	170
6. 4 DP 生のスタンス	171
7. 分析と考察	171
8. おわりに	172

国際バカロレア・ディプロマプログラム「美術」「比較研究」について1

— 学習内容の整理と生徒の議論的な振り返りの比較と考察から —

東京学芸大学附属国際中等教育学校 後藤保紀

1. はじめに

国際バカロレアのDP (Diploma Programme; 以下 DP) 「美術」では「比較研究」を行うことが規定されている。日本国内の芸術科 (美術) で DP 比較研究の形式で批判的思考と分析に焦点を当てた研究活動を授業にするのは少数派の選択であろう。実際、高校生がこれから示す評価規準を偏りなく満たすには、研究者として一定以上の成功経験が必要である。美術で比較研究をすることは他の教科とは違う意味があり有意であると本校の DP 生徒は考えている。TOK (Theory of Knowledge) によって他教科等との関連性や教科の独自性を認識し、学びのバランスを自己形成として捉えたときに美術も必要であったと振り返っている。比較研究は他教科と共通する方法でもある中で、生徒たちは、DP 美術において“作品には鑑賞の自由があり不確かなものを対象にしている”ことに直面した。筆者は、授業実践者として実感の伴った理解を深めなければならない。そのためには内容と評価、振り返りをまとめることで自ら比較研究の概念を更新する必要があると考える。本研究はその第一段階として、DP 生が美術の比較研究を実践する意味について、質的な側面から明らかにすることが目的である。

2. 研究の方法

本校の第6学年における DP 選択者は8名と少数であり、個々の生徒の思考を反映させることに適している。初年度の研究として比較研究の学習内容を整理した。基礎研究としての性質を有している。まず、比較研究の形態を「目的、形式、内容 (評価)」の順で整理した。特に目的を明確にするには、DP 「美術」の包括的な目的を示す部分から抽出する必要があった。次に比較研究の内容と評価について整理し、形式の構成条件について示した。本校生徒が作成したページを例にして DP 「美術」の実態から基礎的な理解を図っている。さらに生徒の議論から比較研究に関することを抽出する。それと「目的、形式、内容 (評価)」を筆者が比較し、DP 生が美術の比較研究を実践することの意味について明らかにする。

DP 「美術」の日本語の文献は公式ガイドの他には見当たらず、関連書籍も英語によるものである。国際バカロレアのワークショップでは詳しい資料が出回るが、それは企業秘密のような価値をも有していることから公開や言及が難しい。ゆえに筆者の実践と生徒の思考による質的な説明が、エビデンスとしての強みである。

3. DP 「美術」における比較研究の目的

比較研究の目的は独立して表記されてはおらず、「美術」全体の説明の中で他の評価課題と合わせて関連的に示されている。その中から比較研究の目的として直接に沿うものを以下について抜き出し¹⁾ 筆者の解釈を加えた。

生徒は技法の習熟を目指し、芸術作品の制作者としての自信をつけるのと同時に、問題解決と独創的思考における分析的なスキルを育みます。生徒は異なる観点と異なる文脈で美術を探究し比較することに加え、同時代の芸術活動および表現手段と幅広く関わり、体験し、また批判的に振り返ることが求められます。

「IB の使命」ⁱ⁾ および「IB の学習者像」ⁱⁱ⁾ に即し、ローカルな地域、地方、国、世界のあらゆる場所で、また多様な文化の境界を超えて、生徒が自由に、積極的に美術を探究することを推奨します。

探究、調査、振り返り、および創作活動を通じて、自身を取り囲む世界の表現および美学の多様性に対する理解を深め、批判的な知識をもった視覚文化の作り手、そして受け手となります。

書かれている視点は、表現者及び研究者としてのスキル、自己の文化的環境を十分に生かすこと、美学の価値意識で探究することである。生徒の研究者のスキルを高校生として身につけるための一方法として比較研究があり、生徒自身の文化的環境を生かすことを勧めている。できるだけ実感を伴って説明できると自己矛盾に陥らない。DP生徒の多くは複数の文化的環境での生活体験があり、国際バカロレアの目指すものはインターナショナル・スクール生徒の特性と深く結びついている。

高校生における「美学」の視点は、作品等についての議論における文脈的な分析によって概念を構築していくことで学びをつくることができると考える。

4. DP「美術」における比較研究の形式と既習事項

「比較研究」は理論的実践にあたる。プロセスポートフォリオは作品制作の実践、作品発表はキュレーションの実践として位置付いている。理論的実践は、「文脈に沿った美術」、「美術の方法」、および「美術のコミュニケーション」の3つの同等の領域（コア領域）で構成されている。また、コア領域の一つ一つが準備の過程として位置づけられおり、比較研究の実践には既習事項が必要であることが読み取れる。

4. 1 比較研究の形式と本校の特徴

標準レベルと上級レベルの生徒は、3つ以上の芸術等を選択し、そのうちの2つ以上は異なる芸術家の作品である必要がある。標準レベルでは10から15枚の画像ファイルと使用した資料のリストを提出する。加えて上級レベルは、自身の作品が比較研究の対象から影響を受けたことを3から5枚の画像ファイルで分析し提出する。その他の評価課題を合わせた学習時間数は「標準レベル」は150時間以上、「上級レベル」は240時間以上の授業時間が推奨されており、その違いは能力別という意味ではない。本来は、芸術の第6グループにおいて科目とレベルの選択が可能なのが国際バカロレアとしては望ましいものの、本校ではDP生徒全員が標準レベルで履修している。一部の美術に特化した生徒を対象としたものよりも、どのDP生徒も必修科目として取り組める環境が特徴である。

4. 2 コア領域と比較研究

○ 文脈的に沿った美術と比較研究

「時代、場所及び文化の異なる芸術家の作品を一連の批評の方法論を活用して検討、比較する²⁾」。そのためには、異なる文化的文脈から芸術家の作品を考察し、比較する経験や、自分の作品及び他者の作品に影響を与えている文脈について考察する経験が必要である。

○ 美術の方法と比較研究

「芸術作品を制作する様々な技法に目を向ける。様々な技法が進化してきた理由とその方法、またそこでの過程について調査、比較する。³⁾」作品を構成する材料（素材）や技法の特徴を見出すには、作者の制作の始まりについて分析的に見ていくことが必要である。構成と計画、その後の計画の変更や元々計画が無いことなどの前提を捉える。もし、自分が作家と同じ制作プロセスをたどるとしたらどうするかという視点が必要である。

○ 美術のコミュニケーション

「視覚的および記述的手段を介したコミュニケーションの方法を探求ⁱⁱⁱ⁾する。知識と理解を最も効果的に伝える方法について芸術的選択を行う⁴⁾」例えば、「絵の中の右から2番目の人の背景に着目する」という指示的な

言語は矢印等で示すことでよりわかりやすくすることができる。美術表現の視覚性を最大限に活用できることが望ましいと考える。過度な装飾や色彩の誇張などは国際バカロレア評価でも、一般的な研究発表スタイルとしてもマイナスとなることがある。

4. 3 既習事項1 「Comparative study」

8つの作品から比較するペアを見つけて、類似点と相違点を明らかにしながら分析的に鑑賞している。類似点を見つけられることが前提であり、構成の似た作品同士を結ぶ傾向にある。生徒たちは色彩や形、光のような学習指導要領でいう〔共通事項〕を中心にみながら、構成や技法、表現の目的や機能にまで目を向けている。

文脈によるフォーカスは比較に欠かせない。例えば、木がしなっている浮世絵のシーンを実際に撮影しようとした場合、かなりの強風時である必要がある。そして小川が流れる平野で見通しのよい場所が適切である。ここでの文脈は、「時間的、空間的位置づけ」である。写真が発展していない時期に、浮世絵で瞬間の記録のような表現ができる理由や、なぜ写真による再現に取り組んだのかという問いが新たに発生するところまでを経験する内容である。

4. 4 既習事項2 「Is it art?」

生徒は様々な状況の写真やイラストを見比べて、美術であるかそうでないかを分けてその理由を述べ、反対の意見のチームと議論をする。例えば窓ガラスを割っているイラストがあるが、これをアートであるとしたチームの意見は「例えば映画などでこういう情景描写をしなければ伝わらないことがある」という見方であった。アートではないとしたチームの意見は「倫理的な問題で、そもそもアートとして成立していない」というものであった。この二つのチームは違う文脈でイラストを解釈している。

5. DP 「美術」における内容と評価

比較の対象、特に作品は実際に鑑賞の経験があるものをお勧めするが、必須ではない。批判理論および方法論の観点を応用し、これまでの研究や探究のスキル、例えばATL (Approaches to Learning) スキルや4年次のパーソナル・プロジェクトの経験を活用して選択した作品を調査、解釈する。生徒たちは批判的に振り返り、成果を分析して「絵や図示、写真」と「文字や文章」で効果的なスライドで表現し、提出をする。学校の学問的誠実性の方針に従い、その学問的な引用体系を活用し、堅実で信頼できる資料により、自身の解釈の根拠を示すことが求められている。また、上級レベルの生徒は自身の作品制作の実践と関連させることが必須である。

以下、観点ごとに節を分け、内容と評価、例示及び解釈を加えてより具体的に捉えられるようにした。四角内は、International Baccalaureate Organization 『ディプロマ・プログラム (DP) 「美術」指導の手引き』よりクワイテリア⁵⁾の引用である。また、本校の事例よりも関連書籍による解説を優先している節もある。

5. 1 「A 形式的特性の分析」の観点

【最高得点6点中、得点5-6レベルの説明】

少なくとも2つの文化的起源から作品を選択し、形式的特性を特定し分析している。形式的特性の分析に一貫性があり、効果的である。

生徒がアーティスト別にジャポニズムの違いを研究した。ジャン・クロード・モネとヴィンセント・ファン・ゴッホはそれぞれに日本美術の影響を受けているが、両者が影響を受けていることには違いがある。形式的特性とは学問的に位置付けの意味に近い。研究者の文献を中心に作品や芸術家、アートムーブメントの調査に取り組

み、比較対象としての選択をする。そのためには、自分の文化や美術の歴史の理解を深めていく必要があるもの
と考える。

5. 2 「B 機能と目的の解釈」の観点

【最高得点6点中、得点5-6レベルの説明】

選択した作品の制作された文化的文脈における機能と目的について、一貫して情報に基づいた適切な解釈が示されている。

選んだ作品が何のためになぜ存在しているのかを文化的文脈から特定していく。例えば「多くの作品は複数の
機能を果たしており、例えばウェディングドレスは文化と儀礼の両方を象徴するもので、審美的に美しいと同時
に衣服としての実用性を兼ね備えている⁶⁾」のである。ウェディングドレスの情報を国の違いや日本国内におけ
る地域の違いなどを基盤にした文化的文脈においてより掘り下げていくことが可能である。

5. 3 「C 文化的重要性の評価」の観点

【最高得点6点中、得点5-6レベルの説明】

選択した作品の制作された特定の文脈における素材や作品概念、文化における重要性について、一貫して情報に基づいた
適切な評価が示されている。

図1 生徒による比較研究 文化的重要性のページ



[Figure4] 'Jardin Des Plantes.' MUSÉUM NATIONAL D'HISTOIRE NATURELLE. n.d. Web. 2 August 2017. <http://www.jardindesplantes.net/>.
[Figure5,6] 'Paris Colonial Exposition.' Alchetron. n.p. n.d. Web. 3 August 2017. <https://alchetron.com/Paris-Colonial-Exposition-4017451-W>.




Orientalism Although Henri created many jungle paintings in his career, he never traveled outside France and saw the real jungle. Therefore, all these world of jungle are his imagination. His imagination of jungle are based on his observation at the Paris Museum of Natural History and its Jardin Des Plantes, a botanical garden. Even though his drawings of jungle are based on the observation, plants in the painting don't exist in fact. There is his comment on the visit to there; " when I am in these hothouse and see the strange plants from exotic lands, it seems to me that I am entering a dream." At that time, people had an image of an orient as mysterious exotic. For 19th century Europeans, the 'Orient' represented all of the lands east and, occasionally, south of their home continent. In 1798, Napoleon invaded Egypt and European colonialism has spread. Many European countries expanded their territories to the East, then orient culture were brought to Europe. At the beginning, those culture were told through journals and magazines written by missionaries or soldiers to the European. Then in the middle of 19th, the image of orient world were spread through media, literature and colonial expositions. People dreamed of those mysterious world and this ideas is called as *orientalism* or *exoticism*. It has influenced European artists significantly.

Intention The piece demonstrates Henri's full imagination towards the Orient. Even though he had never been to the Orient, he tried to express his ideal and imaginary exotic world. A nude lying on the sofa is said that she was his girlfriend, Yadwigha. Her left arm reaches towards the black snake charmer playing flute. Henri wrote a poem to accompany the piece. According to this, the underlying story is that while listening to a beautiful music by a snake charmer, Yadwigha is dreaming of where she would transported to the jungle. Many animal are showing their bodies from the plants. There is a one who control them, that is a snake charmer, as he describes. By bringing two women from different world into the painting, the work represents a mixture of imagination and reality, domestic and exotic world. Also, it shows his love towards his girlfriend. The title of the piece 'The Dream' concludes the society at that time and also his personal situation.

REPUBLICQUE FRANCAISE
EXPOSITION COLONIALE INTERNATIONALE
PARIS 1931

Figure6. Poster of the expo

[Figure7] 'Orientalism' Khan Academy. Nancy Damerdash, n.p. n.d. Web 26 July 2017. <https://www.khanacademy.org/humanities/becoming-modern/intra-becoming-modern/a/orientalism>.
[Figure8] 'The Snake Charmer.' RMN-Grand Palais (Musée d'Orsay). Hervé Lewandowski. N.d. Web 26 June 2017. <http://www.musee-orsay.fr/en/collections/works-in-focus/search/commentaire_id/the-snake-charmer-8959.html?tx_commentaire_pi1%5BpidLi%5D=509&tx_commentaire_pi1%5Bfrom%5D=841&chash=139718d5b>.




「一貫して情報に基づいた適切な評価」を示すのは生徒である。特定の文脈とは、作品や作家の文脈のことであり、そこに見られる文化的文脈を見出すことが必要である。図3はアンリ・ルソーの表現内容に深く関係するオリエンタリズムについて文化的重要性を示している例である。制作の時と場所、鑑賞者などについて着目している。

5. 4 「D 比較と関連付け」の観点

【最高得点6点中、得点5-6レベルの説明】

選択した作品間の関連性、類似点および相違点を批判的に分析している。示された関連性は論理的で一貫しており、作品の比較方法について完全な理解を示している。

図2、図3のように芸術家の比較よりも作品そのものの比較をすることが大切である。ベン図を使い、類似点と相違点について示すのは適切な表現の一つである。特に表現の形態や技能的な側面、テーマについての比較を示しやすい。比較することと関係のないものを残して示すことに気をつける。ブレインストーミングの時点では積極的に気付きを書きとめ、提出用のページには要点を示す方が伝わりやすい。

図2 生徒による比較研究 作品の比較のページ1

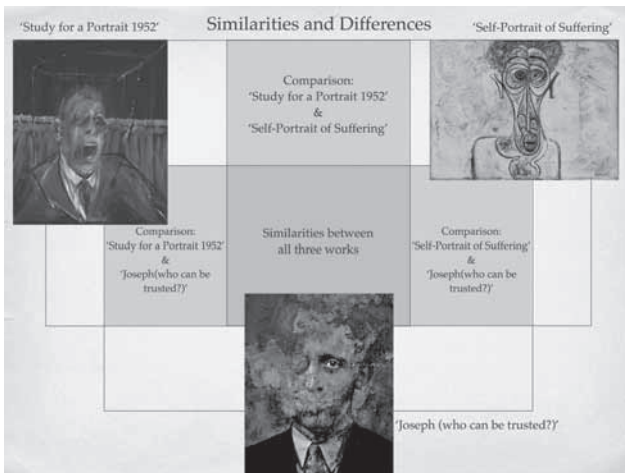
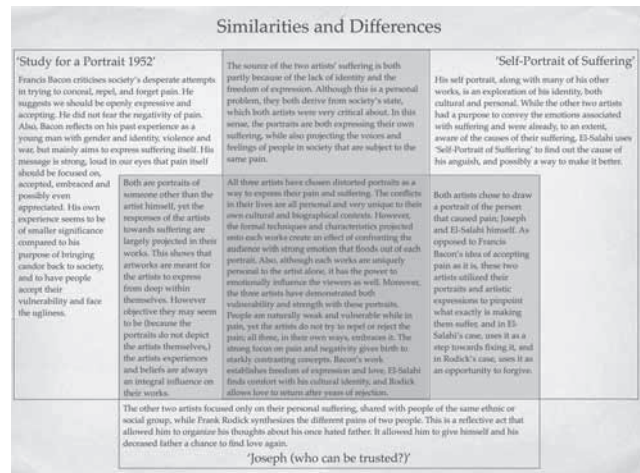


図3 生徒による比較研究 作品の比較のページ2



5. 5 「E 発表と科目特有の言語」の観点

【最高得点6点中、得点5-6レベルの説明】

明確かつ理路整然と情報を伝達しており、視覚的に適切で、読みやすく興味を引く研究となっている。全体を通して科目特有の言語を正確かつ適切に使用している。

視覚的および記述的手段を効果的且つ適切に使用することが求められている。明確に記述されていても、視覚的に示せなければ伝達しないということでもある。

記述に用いる語句については、これを用いなければならないといったものはない。関連書籍ではこの教科特有の言語の習得できる視点や実践を提示している。美術作品を一つ選び、フォーマルな特性、技法、材料（素材）、目的と機能について教科特有の言語を用いて述べ、特に目的と機能については何を鑑賞者に伝えているかという視点が必要で、これらは作品のもつイメージやリソースを含めて述べるのが大切である⁷⁾。

美術館やギャラリーでの鑑賞時にフォーマルな分析を行い、教科特有の言語を有する資料にたどり着く可能性を高めることが効果的である。実際の作品を目の前にして、どのようにして作品が作られておりその技法や材料（素材）は何か、どうやって構成されているのか、どのようにして展示空間は表現され、なぜキュレーターはこの場所で展示をしたのか、文脈の意味を考えるなどを考察することが必要である。

5. 6 「F 自身の作品制作の実践への関連付け（上級レベルのみ）」の観点

【最高得点6点中、得点5-6レベルの説明】

一貫して適切に研究の結果を分析し振り返っている。自身の成長のついで的確な考察を行い、自身の作品制作の実践への情報に基づいた有意な関連づけを行っている。

この関連づけは研究が振り返りと分析を通して自分の表現の発展に影響を与えたかという視点に立ったものである。一つ、もしくはそれ以上の芸術家の作品と自分の作品を関連付ける必要がある⁸⁾。

本校ではこの HL が実施されていないため筆者の実感を伴った解釈をすることが難しい。ただし生徒自身の制作への関連づけは表現と鑑賞の一体化を示している。学習指導要領ではこの必要性が書かれており、また比較研究の影響を受けて制作へと反映している生徒がいてもよい。教育的立場に立てば標準レベルの生徒も実施したほうがよいのではないかと考える。

ただし、表現と鑑賞の一体化はアートプロセスジャーナルを活用したりサーチや分析、考察等で十分に行われている。上級レベルの自身の作品への関連づけは本質的には標準レベルでも行うべきだと考えるが、オプションであることについてはさらなる研究が必要である。

6. 生徒による DP「美術」比較研究の意味付け

DP「美術」を質的に捉えようと、2年間の学習を実際に終えようとしている生徒たちの思考を引き出し、読み解くことに着手した。DP 生の使用する教室の壁面はすべてホワイトボード仕様となっている。この特性を生かして体の周りをペンでなぞり、人型を描くところから始めた。生徒たちの感覚により、頭部と手が作品発表、下半身がプロセスポートフォリオ、胸のあたりが比較研究で、お腹に直感や想像を示している。比較研究について第6学年 DP 生と授業を通じたインタビューでわかったことは以下のことである。授業日は2018年1月30日である。

図4 DP「美術」の視覚化と比較研究経験



6. 1 TOK の関連について

生徒に比較研究と TOK の関連について質問した時の議論を以下にまとめた。

TOK に関連した「理性」「知覚」「感情」「言語」による議論ができそうである。

- ・ DP「美術」の比較研究を行うにあたり、作品を選ぶときに「感情」を優先させている。
- ・ DP「美術」の比較研究を行うにあたり、作品を選ぶときに「知覚」や「言語」活用している。

・DP「美術」の比較研究を行うにあたり、実際に比較するときに「理性」や「言語」を活用している。

実際の生徒の会話の中で出てきた順番は「理性」「知覚」「感情」「言語」である。生徒は、「アートは他のもの教科よりも感情を引き出すものが含まれているから、比較研究の結論も『この表現が感情と結びつく』というような視点で考えている」と話す。

6. 2 他教科との関連について

生徒に比較研究と他教科の関連について質問した時の議論を以下にまとめた。

- ・科学では、例えばフロギストンについて比較研究をしたことを覚えている。
- ・文学では、例えば太宰治と井原西鶴について比較研究をしたことを覚えている。
- ・数学では、数の証明をする際に比較研究をしたことを覚えている。
- ・歴史や現代社会では、異なる戦争や時代、政治体制などを比較研究したことを覚えている。また、この教科では常に行われている。

他教科においても比較研究は実践されていることがわかる。比較研究を実践する上でのスキルは、他教科でも培われている。生徒は「芸術作品における文化的文脈においては文学が近い」と話し、「文学と美術の決定的な違いは、(美術では)自らが表現者として取り組んでいること」であるとする。自らが表現者である前提がある中で、比較研究に取り組んでいるのが他教科と違うことである。

6. 3 比較研究に対する生徒の考えについて

2018年1月30日の授業で生徒たちが「DP「美術」を終えて振り返る」をテーマに議論した時間のうち、比較研究と自分たちの作品発表とを比較して話す一節である。本時のディスカッションは筆者が日本語で研究に活用する趣旨を伝えてあるため、生徒も日本語を使用している。用語はできるだけ揃え、臨場感が伝わるよう口語のまま掲載している。

生徒 A：メディアという色が強いのかなと感じていて、何か発信したいものがあって、それをどう表現するかということところがDP「美術」で最初から最後まで意識してきたことだと思うから。

美しさを感じるのは、相手を感じることで想定して、例えば比較研究は、私たちは完全にオーディエンス側で、オーディエンス側の立場に立ってこの人(芸術家)たちがどういうふうに関心して。媒体となった作品は媒体としての役割、つまり本質を知るということは書いた人の考えを知るとのこと。最終的な Exhibition (作品発表) では、その立場が逆転して、僕らは発信する側に立って、作品という媒体を使って何を発信したいのか。最終的には自分がどういう形で伝えれば、見ている人たち側に伝えたいように伝わるかとかはすごく普遍的なところかな。

生徒 B：だからと言って文字ばかりではない伝える手段として、どう考える？

生徒 A：その伝え方は普段は言葉とか文字だけど、その伝え方を工夫するのが美術だと思っていて、美術って枠がないじゃない。どのように表現すればよいか、物質的な媒体の違いもそうだし、どんな色をつかうとかもそうだし、どういうふうに関心するかという文脈づくりでも伝わり方は変わるし、あらゆる要素を踏まえて自分の意思を発信するという意味では、普段の意見交換で行っている意思発信で行っていることよりも何十倍もの要素がいっぱいあって、そこをうまく駆使できるかどうかはその人の美的センスとかアートにおける機能なのではないかなと。

生徒 C：私失敗したなそれ。なぜかという私、ある自分の作品についてはすごい意味を込めすぎたから、いろんなインテンションがあるけど、見た人は何を言いたいのかちょっとわからないと。

生徒 B：それも大切なことで、(作品の)隣につけるじゃない、キャプション。

生徒 A：それって種明かし感があるよね。

生徒 C：まあでもそうだよな。

生徒 B：自分が意図するものを相手にどのように伝わるかを考えたらいいなかな。

生徒 A：すごいジレンマだよ、例えば超有名な画家とかが描いた絵ってさ、理解するの、すごく大変だよ。

ある意味、作った人の伝えたいことが円滑に伝わっていないということでもある。今言ったことと近いような話。でもオーディエンス側の捉え方の多様性があることはいいことだという考えがあって、つまり私たちがここでやることもある意味そのまま伝えたいことが伝わればよいのではなくて、それをもっと多様性も考慮したものなのだと思う。

比較研究では鑑賞者として研究をする立場、作品発表では制作者として研究する立場として話を進めている。生徒 D が最後に「ジレンマ」と話しているように、表現の本質は制作者にしかわからないことを自らも制作者として実感している。その制作者の特徴を客観的に、特に文化的文脈で見たときに「美術」の体系的なものを発見できるだろうとして取り組むことの難しさを理解している様子がうかがえる。

さらに、「あらゆる要素を踏まえて自分の意思を発信するという意味では、普段の意見交換で行っている意思発信で行っていることよりも何十倍もの要素がいっぱいあって、そこをうまく駆使できるかどうかはその人の美的センスとかアートにおける機能なのではないか」とあるように、鑑賞者と表現者の研究における違いを体得し始めている。比較研究は鑑賞者としての研究の視点を与える機会であるものと考えられる。

6. 4 DP 生のスタンス

DP 生は比較研究の目的や内容・評価を含む学びの主旨を理解しなければならない。それには、図にある「単体だけでは気付かない」ことへの興味が必要で、文化的文脈の違う対象を比較するためのテーマや視点の大切さが浮き彫りになった。生徒は議論の中で、鑑賞と表現の関連について双方を研究する立場から意義を見出そうとしている。図4に書かれているように「私たちは比較をとおしてものごとを認識している」姿そのものである。また、比較する作品それぞれの理解が浅いまでは比較ができず、ましてや比較する視点やテーマが定まらないことを生徒は知っている。作品を選ぶときには、「感情」を優先していると生徒が自負していて、すでに美術を楽しむことを前提に取り組んでいる。

7. 分析と考察

本研究の大きな問いは、DP 生が美術の比較研究を実践することにどのような意味があるのかである。目的や内容・評価の整理は作品や芸術家を文化的文脈によって分析する批判的思考の学びについてであり、DP 生の議論は「美術」を履修した人間としてみた比較研究の意味付けであった。前者と後者を比較し、類似点と相違点についてまとめ、考察を加えた。

類似点を示すのは、DP 生は比較研究の内容と評価を“資質・能力”として捉えていることである。美術の視点から「問題解決と独創的思考における分析的なスキル」を培うことができることに気付いている。そして美術が文化的文脈において表現者と鑑賞者としての立場になることを認めつつ、エビデンスを自ら残しながら美術の鑑賞者としての研究による一つの価値形成をしている。DP 生が学際的な研究の幅をもつためにも、比較研究は学習として機能しているものと考えられる。

相違点は、生徒 D が「ジレンマ」や「(美術には) 普段の意見交換で行っている意思発信で行っていることよりも何十倍もの要素がいっぱいあって、そこをうまく駆使できるかどうかはその人の美的センスとかアートにお

ける機能なのではないか」と話しているように、後者は表現者としての研究と鑑賞者としての研究を行き来することへの葛藤が見受けられることである。一般的には、美術の授業は自己表現を中心的に行うことが多い。鑑賞者である他者評価として比較研究を行い自己表現と他者評価のバランスのズレに気付いていると考える。

8. おわりに

DP生はもちろんのこと、同年代の高校生にとって美術の学びのウエイトを大きくすることがエモーショナルな実践や研究を保証し、学びに向かう人間性の幅を広げるであろうという大概念のもと、本研究に取り組んでいる。比較研究の目的や形式、内容（評価）について、国際バカロレア関係以外の教師や教育関係者に説明できる程度に整理ができた。DP生は美術を考える上での表現者として研究することと、鑑賞者として研究することの違いを実感しており、そのバランスのズレについて認識している。このことは、本校のDP生のようにMYP（ミドル・イヤーズプログラム）やPYP（プライマリー・イヤーズ・プログラム）から探究を積み重ねてきた生徒には培って欲しい資質・能力であり、比較研究もその一翼を担っている。また、本研究の課題の一つである「自身の作品制作の実践への関連付け」は、学習指導要領では評価課題の縛りが無く鑑賞と表現の一体化の中で実現できる。一般的には効率の良い比較研究を行うことで新しい学びの方向性が広げることができるものとする。DP美術全般における「美学」の視点についても継続的に整理する必要がある、今後の課題である。

注

- i) IBの使命；International Baccalaureate Organization, 『DP：原則から実践へ』, p3, 2014, より引用「国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。」
- ii) IBの学習者像；International Baccalaureate Organization, 『DP：原則から実践へ』, p4, 2014, より引用「探究する人 知識のある人 考える人 コミュニケーションができる人 信念をもつ人 心を開く人 思いやりのある人 挑戦する人」
- iii) 同, p. 33 原文中に「探求」と表記されていたが、国際バカロレアは探究を用いており、「探究」の誤りであると考えられる。

引用・参考文献

- 1) International Baccalaureate Organization, 『ディプロマ・プログラム（DP）「美術」指導の手引き』, 2014年3月に発行の英文原本 *Visual arts guide* の日本語版, p7
- 2) 同, p.34
- 3) 同, p.34
- 4) 同, p.34
- 5) 同, pp 48-51
- 6) Jayson Paterson, Simon Poppy, Andrew Vaughan *OXFORD IB DIPLOMA PROGRAMME VISUAL ARTS*, p.53, 2017 筆者意識, 以下原文
Many pieces will fulfill more than one function, for example wedding dress is: symbolic both of a culture

and of a rite of passage; aesthetically beautiful and at the same time a practical item of clothing.

- 7) Heather McReynolds, *IB Visual Arts for the IB Diploma*, Cambridge University Press, p163, 2017 筆者意識, 参考
- 8) Jayson Paterson, Simon Poppy, Andrew Vaughan *OXFORD IB DIPLOMA PROGRAMME VISUAL ARTS*, p.67, 2017 筆者意識, 参考